明治二十一年十二月二十六日内務省許可

大正四年七月二十五日發行

婦人衛生雜誌

第三百八號

婦人衛生雜誌

第三百八號目次

稟告

來る八月及び九月の例會は本會規則に據り例年の通り休會致候也

暑中特に會員諸姉の健康を祈る

大正四年七月

私立大日本婦人衞生會

私立大日本婦人衞生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんと皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれは此生活を得んこといと易からずこれ衞生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も／＼衞生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつばら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衞生の事に至りては更に注意を惹かざるもの丶如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衞生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衞生上諸般の講義演説談話をこひ互に相研究し尚之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす玆に本會旨趣の梗概を敘べて廣く江湖の諸愛姊に告げ其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月　首唱者總代

私立大日本婦人衞生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衞生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衞生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節には姓名族稱住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續發未に詳なり）入會後轉居、等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三十名、書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は滿年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託するとあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の件●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生するときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　總會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし●第十七條　每會學識經驗ある人々に衞生上の講義演說談話を囑託し會員をして隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々塲に誘致し講義演說等を傍聽せしむるとを得（但衣服は總て質素たるべき事）●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　每年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會の設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本支會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其會費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし●雜件　第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄附者の姓名及品目を雜誌に登錄し尙本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證を送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし振替貯金にて口座番號東京一〇六〇〇番本會事務所宛に提出しあるべし●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議員會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衞生會

講演

「ペスト」に就て

醫學士　伴野末治

唯今御紹介下さいました伴野でございます、私は殊に「ペスト」に就きましては未だ經驗が非常に少ないのでございまして皆さんにお話申上げるやうな材料も有ちませぬのでありますが、今日は見て覺へたり聞いて覺へたり、或は書物で覺へた事を掻き纏めてお話致します。

此處に在る寫眞帖は明治三十三四年に滿洲にあつた非常な激烈な肺「ペスト」の狀況を寫眞に撮りまして内務省から出した寫眞帖であります、是は明治二十六年に香港に「ペスト」があつた時に北里博士、青山博士、其外宮本博士等が御出張なさいまして實際の慘狀を見ましたのを寫眞に撮つたのであります。

「ペスト」と云ふ病氣は餘程昔から在つた病氣でありまして、今より約千數百年前から世界の或一地方に在つたと云ふやうな記錄もあります、其一地方と申しまするのは印度の或一部分、それから南支那の安南地方、もう一つは亞弗利加の一部分でありまして其病氣は流行病としてよりは一種の地方病としてあつたのであります。此「ペスト」は三つの地方に於きましては毎年絶ゆることなしに殆ど春夏秋冬ありまして、それが段々世の中の文明が進んで來るに從つて、東洋と西洋との汽船の往復なども頻繁になりまして、安南だの印度の地方及埃及の方にも斯う云ふ「ペスト」が搬ばれて參りまして、尙進で船で歐洲に傳はりました、もう一つは陸を通つて印度から波斯を通つて矢張り歐羅巴に擴がつて參りました、そう

して十三世紀の終りから十四世紀に懸けて歐羅巴全體がまるで此「ペスト」の爲に襲はれて仕舞つて人口の四分の一は「ペスト」の爲に全然喰殺されて仕舞つたと云ふ記録があります、その頃から「ペスト」を一名黒死病と申してそれは黒くなつて死にますので黒死病と言はれて居ります、黒死病と云ふのは怖ろしいと云ふ別名であるかの如く歐洲では非常に恐れて居つたのでありましたが、段々衛生の思想が發達して參りまして、豫防の方法に力を盡しました結果、歐羅巴に於きましては殆ど「ペスト」と云ふ病氣は其後絶へて仕舞つたのであります、然に東洋の地方ではまだ「ペスト」が絶ゆることなしに矢張り安南地方及印度地方に地方病として殘つて居りまして、それが時々船や其外の物に附いて搬ばれて來るのであります、最近に於て最も悲惨な例は明治二十五年に安南地方から來ました「ペスト」が廣東に於て非常に爆發的に一遍に患者が生じまして、其時の記録に據ると、此「ペスト」の爲に死んだ者が十四萬人と云ふ多數でありまして、日本から其廣東地方に商に行つて居つた人の話に據りますと、棺桶を賣る人が四萬六千の棺桶を皆賣盡したと云ふことであります、それを見ましても餘程此「ペスト」が廣東地方には其頃流行したものであると云ふことを想像することが出來ます。

それから其翌年卽ち明治二十六年に廣東から香港に「ペスト」が現はれてまゐりました廣東と香港との間はさう遠くない所で一日に二回も汽船の往復がある位な所で、一年間に往復する人の數は百萬人と云ふ非常に交通の激しい所でありますので、從つて廣東に流行があれば香港にも必ず流行を見ると云ふことは疑のないことであります、果して明治二十六年に香港に大流行がございましたが、其時先程申上げた通り我國では北里博士及靑山博士が御出張になりまして審査をなされて「ペスト」の豫防法其外「ペスト」に關する種々の事を研究なされました結果、今日に於ては「ペスト」を豫防する方法、其他に就きまして

其御蔭を蒙つて居ることは一通りではありませぬ、其年に矢張り佛蘭西のお醫者さんでエルザンと云ふ人が其前まではサイゴンに居りましたが、香港に大流行があると云ふことを聞きましてサイゴンから態態香港に來まして、同じく「ペスト」の研究をして居りました、此エルザンと云ふ人は「ペスト」に罹つた人の血液の中及び、死んだ人の臓器などから或一種の黴菌を見出しました、それは今でも尚ほ其通りである、それが「ペスト」菌でありますが、其名譽の爲に吾々はエルザン菌と呼んで居ります、で滿洲に流行した「ペスト」も、香港で流行した「ペスト」も、亦現在唯今東京地方に流行つて居る「ペスト」も皆同じくエルザン氏の發見した「ペスト」の黴菌に由つて擴がる一種の傳染病であると云ふことが其時始てはつきりとなつたのであります、それから降つて大流行のありましたのは其處の寫眞にありまする通り明治三十三四年の二年でありまして、其時に滿洲に非常な大流行がありまして、此「ペスト」の爲に死んだ人の數が四萬三千人と云ふ位であります、斯う云ふ風に短日の間に斯くの如く多數の人を喰殺して仕舞つたのであります。

それは外國の例でありますが、我日本の國に於きまして、此「ペスト」の入つたのは何時頃であるかと申しますと、元來此「ペスト」が流行るには何時も／＼例外なしと云ふ位で、何時でも外國から持つて來る外國から船に積んで持つて來る荷物と一緒に附いて來る、詰り此「ペスト」の病毒が荷物に附いて來て、さうしてそれが日本に搬ばれると云ふ事はもう既に御承知であることゝ思ひます、一番最初に日本に流行したのは明治三十二年であります、其次は三十四五年で、第三回目に流行したのは六年から九年に懸けて大流行をしたのであつて、其後大正二年三年から今年に懸けても方々に流行して居るのです、明治三十二年以來日本全國で「ペスト」で斃れた人の數は約二千五百人以上になつて居ります

次に東京に於て始めて「ペスト」の入つのは明治三十

五年の十二月だと思ひましたが、本所押上の東京瓦斯紡績會社に出たので、それが東京に於ける第一回の流行であります、其時の患者の數は十五人ばかりであつたが、それから明治三十八年にもう一回ありました、其時は患者の數十五名でありました、その後暫くありませんで明治四十二年に四名の患者が出ましたこれが第三回の流行でございます。それから一昨年から昨年に懸けて患者の數は四十六人東京に出て來ました東京に「ペスト」が入りましてから約八十人の人が「ペスト」の爲に苦しめられた譯になつて居ります。

この「ペスト」を豫防する爲めに政府に於て又公共團體に於て費した金といふものは實に巨額のものでありまして明治四十年までの調べに據ると、約五百萬圓以上を費して居ると云ふことで、患者一人に付平均約四千五百圓の金を費して居る譯になる、殊に東京市の如きは明治三十五年の場合で、患者一人に付二萬五千圓の金を費して居ると云ふことが記録に遺つて居ります、斯くの如く澤山の金を費した譯ですが、其外商業、工業等に及ぼした影響は一寸算盤で勘定が出來ませぬ位澤山なものであらうと思ひます、殊に本年は御大典もある年でありまするので、都下に於て斯くの如き惡疫が流行して居ると曰ことは眞に畏多い次第でありまして、吾々が一致協力して此惡疫を一日も早く絕やして仕舞はなければならないのであります、而して之を絕やすには官廳の力も無論必要でありまするが、殊に皆さんの力に俟たなければならないものが、今日多々あるのであります、でそれは是からお話する事に由つて能く御解りになるだらうと思ひます。

それで此「ペスト」と云ふ病氣は何う云ふ風にして人間の身體に入つて來るものであるかと云ふことに就てお話したいと思ひます。

一體傳染病が人の身體を侵かして來ると云ふのは各各其傳染病の種類に由りまして定まつて居りまして黴菌の入つて來る所はちやんと定まつて居ります、

例へば皮膚から入つて來るものもあり、或は口から入る即ち食道、胃腸と云ふやうな消化器を通つて入つて來るものもありますし、又もう一つは鼻、咽喉、肺等總て呼吸器に由つて傳染るものであるが、皮膚消化器及呼吸器の三通りの道が重もなるものであります、御承知の通り腸窒扶斯だの、是からボツ／＼流行つて來る赤痢だの、大正元年に流行のあつた虎列剌と云ふやうな病氣は皆皮膚からも入りませぬし、呼吸器からも入りませぬ、皆是は口を通つて入つて來る……所謂消化器を通して人に傳染するのである、それから丹毒などになると身體が腫れて赤くなる……それが丹毒と云ふ病氣でありますが、此病氣は口からも呼吸器からも入るものでありませぬ、重もに皮膚から入つて來る、もう一つ結核と云ふ病氣は是は呼吸器から入ります、それで呼吸器から入れば肺結核になるし、消化器から入れば腸結核になる皮膚から入れば皮膚の結核になります。

で今お話致しまする「ペスト」は何處から入るかと云ふと是には二通りの道がありまして、一つは皮膚から入ります、其皮膚から入る方は眼に見えない逆剝のやうな或は搔いた痕でも唯眼で見ては分らぬ位……顯微鏡で見なければ分らぬやうな創が其處にありますと、其創口から黴菌が入つて皮膚から直に其淋巴管を傳はつてぐり／＼が出來るのであります、で此淋巴管からぐり／＼の處に行つて黴菌が非常に澤山に發育しまして、そこでいろ／＼の毒を出して人間の身體を壞はして仕舞ひますこれを腺「ペスト」と申しますもう一つの傳染法は皮膚からでなしに呼吸器から傳染るので、恰も肺炎のやうな症狀を起すのでありまして、それを肺「ペスト」と申します、さう云ふ工合に皮膚から傳染るのと呼吸器から傳染るのとがありまして、大抵此二つの途でございますが、極く稀れには眼から入つて來て、眼「ペスト」となつたと云ふやうな記錄もあります、先づそれ等は非常に稀れな例でございます、其外鼠では腸「ペスト」を起すことがありますが、人間に於て初から腸「ペス

ト」で、腸が「ペスト」の爲に冒されると云ふことは非常に稀であります、併し皮膚から入つて參りまして腺「ペスト」になつた患者でも臨終に近くなれば「ペスト」菌は遠慮なく血管の中に侵入して身體のあらゆる所に喰ひ入るものであるからその場合には肺「ペスト」にも腸「ペスト」にもなる事あるのは勿論の事であります。

さう云ふ工合に「ペスト」と云ふ病氣は皮膚から入るのと、もう一つは口、並に咽喉から入つて呼吸器を冒すのと兎に角此二つしかございませぬ、なぜこの事に就いてなが〱御話申したかと云ふに、この傳染病が人間に侵入する門を確實に知るといふ事はその病氣を豫防する上に非常に必要な事柄であるからであります、

次に何處に「ペスト」の黴菌があつて人間に傳染るのであるかと云ふことをお話しなければなりませぬが「ペスト」菌のある所は何處かと云ふと、「ペスト」に罹つた人の身體の中に「ペスト」菌のあることは確かであります、それからもう一つは是は能く唯今ではどなたでも御存知のない方はない位でありますが、彼の鼠であります、それで此「ペスト」の源は「ペスト」に罹つた人、若くは「ペスト」に罹つた鼠であります、此二つに注意すると云ふことが豫防上最も必要なことであります、それで普通皮膚から入つて來る腺「ペスト」は人から人に直接傳染ると云ふことは極く稀れであります、例へば甲と云ふ人が腺「ペスト」に罹つて居つて其側に行つたからと云つて直ぐ「ペスト」に罹るものでは決してありませぬ、若しぐり〱が破れて敗血症になるとか、若くは皮膚に出來た腫物が破れて其中の黴菌が着物なり、夜具なり又は家具のやうな物が其爲に汚がれて居るやうなことさえなければ決して見舞に行つたから、其部屋に居つたからと云つて直ぐに傳染るものではありませぬ、若しそれが直に傳染るものとしたならば醫者とか、看護婦とか云ふやうな者は皆「ペスト」の爲に斃れて仕舞はなければならない、それは決して傳染る

ものではありませぬ、其ぐり〳〵の中に澤山黴菌があるのでありますが、其ぐり〳〵がありましてもそれが破れない中は大した危險はないのであります、然るに肺「ペスト」の方はそれと全く趣を異にして居ります、此肺「ペスト」の方は人から人に傳染るのであります、例へてお話すると肺結核と云ふやうなものも昔は何時も遺傳性のものであつて、親が肺結核に罹れば子供に結核が遺傳して行くものゝやうに申して居りましたが、段々研究の結果さうではないと云ふことになつた、親が結核に罹つて居れば知らず〳〵の間にその子供に傳染るのであります、ゴホン〳〵と咳をして居る間に咳とか、唾とか云ふやうなものに結核菌が混つて出でそれが子供の口に入り或は口でなしに著物に付く、手に付くと云ふやうな工合になつて、それが知らず識らずの間に咽喉に飲込んで呼吸器に入ると云ふさう云ふ工合に此肺「ペスト」も人から人に段々傳染るものでありますそれでありますから肺「ペスト」の傳染方は非常に烈しいものでありまして、大阪に三十二年にあつた肺「ペスト」などに由つても非常に能く分つて居ります、初め安達と云ふ船乘を業として居た男が肺炎のやうな病氣に罹つた、すると檢疫醫の馬場と云ふ御醫者さんが、それを診察に行つたのであります、さうかうして居る間に安達の妻も同じやうに肺炎のやうな病氣になつた、さうする中に十七になる娘が罹り、それから二十になる息子が罹つて、もう一人は中村と云ふ同居して居つた女の人も同じやうな肺炎の症狀で斃れたのである、さうする中にそれを見に行つた檢疫醫も同じく肺「ペスト」に罹り、其妻も同じやうに肺「ペスト」に罹つて斃れたのである、それから馬場醫師を診斷に行つた若林と云ふ醫者も是も同じく肺「ペスト」に罹り、妻も罹り、車夫までも罹つたと云ふ工合に、殆ど一家全滅で、又若林と云ふ人を診察に行きました、中山といふお醫者さんが矢張り其病氣に罹り、其妻も母堂も斃れたと云ふことでありますが、さう云ふ工合に極く短時日の間に安達、

馬場、若林、中山、四軒の家がまるきり全滅して仕舞つたと云ふ例が今でも記錄に遺つて居ります、之を見ましても肺「ペスト」の如何に怖ろしいかと云ふことが分るのであります。それから明治三十三四年に滿洲に同じやうに肺「ペスト」があつて、短時日の間に四萬何千人と云ふ人が死んだのであります、これに反して此腺「ペスト」は人から人に傳染るのは極く稀れであります、でそれが傳染るのは人から人でなしに、それは鼠であります、卽ち此腺「ペスト」の媒をする奴は鼠であります；「ペスト」と鼠と何か關係があるかと云ふことは是は餘程前から分つて居つたことであつて、明治二十六年に此「ペスト」の爲に出張なされた北里、青山兩博士の本を讀んで見ると、矢張り香港に於きまして、死んだ鼠が路上にどん〳〵捨てられてあつたと云ふことが書いてありましたが、此時の土人に聞きますと、今度の惡い病氣が流行つて來てから路に捨てる鼠の數が多くなつたと云ふことが書てありました、其頃兩博士が此「ペスト」と鼠とに關係の有るものぢやないかと疑はれて居つたのであります、其後印度に流行のあつた時に各國の醫者が集まつていろ〳〵研究した結果、人間に「ペスト」病がある時には鼠の世界にも「ペスト」病があると云ふことが略〻解つたのであります其後三十二年に「ペスト」の流行のあつた時に我國の學者が色々研究をして人間に「ペスト」病がある時には鼠にも斯う云ふ病氣がある、といふ事が確かになりましたそうして「ペスト」に罹つた鼠を有菌鼠と呼んで居ります。

次に「ペスト」に罹つた鼠卽有菌鼠から人間に「ペスト」の傳染るのはどうしてであるかといふ事に就いて御話いたしませう、鼠と云ふ動物は能く共喰をする動物であります、鼠が「ペスト」に罹つて弱わつて居ると外の健康の鼠が來てどん〳〵共喰をするので、其爲に其「ペスト」の黴菌を飮む爲に直に腸「ペスト」になる、さうして其腸「ペスト」になつた鼠の大小便の中には澤山に生きた黴菌が入つて居つて、

それが外に大小便に交つて排泄される、其排泄物が穀物の中に入り、又銘々の手なぞに付いたり、或は臺所にある物、或は襤褸だの、綿のやうな物に遠慮なく鼠が置いて來る、さう云ふ物に觸れないやうな人で「ペスト」に罹つたのは極く稀でありまして、今まで「ペスト」に罹つた人の職業を調べて見ると大概鼠の好きさうな物を手に付けて居る人で、穀屋であるとか或は襤褸商であるとか、綿商であるとか云ふ工合に、其外紡績だとか、鼠に關係の深いことを職業として居る人に多いやうであります。

それから鼠に特有の蚤がありましてこの蚤が媒介となつて鼠の社會に「ペスト」を傳播させるのでありますその蚤を印度蚤と申します。其の蚤が時に由ると鼠ばかりぢやなく人間の身體を刺すことがある。さう云ふ場合には甚だ危險であります、若し鼠が「ペスト」病に罹つて居るとしますと云ふと、其鼠の血を吸つて居る、それが人間を刺すと云ふことになりますれば疑もなく刺れた人が「ペスト」に罹つて仕舞ふと云ふやうなことになるのであります、それで大體「ペスト」は鼠に關係あるものであるといふ事は略々お解りになりましたらうと思ひます。

それから極く簡單に「ペスト」に罹つたら何んな風になるかと云ふことを御話し申上げます。

此「ペスト」と云ふ病氣は前にお話致しました通り腺「ペスト」と肺「ペスト」と二通りありまして、唯見たところでも腺「ペスト」と肺「ペスト」とは非常に違ひます、腺「ペスト」の方は病毒を受けてから發病するまで五六日間位でありまして、急に寒氣を感じたり、慄へが來まして熱が高くなります、さうなりまするど子供などはよく痙攣る事があります、大人でありましても高い熱の爲に意識が溷濁して、朦朧として來ることがあります、さうして其頃から淋巴腺が腫出して參ります、初めは極く小さいものであります、其部分は鼠蹊腺が一番多い、それから腋の下であるとか、頸すじであるとかいふ所にぐり〳〵が出來てまゐりまして初は壓しても左程痛くない位でありま

したが、段々痛が増して參りまして、殆ど自分では少も身體を動すことが出來ないやうになる、大概さうなれば死ぬ者と見なければならぬ、今までの統計に據ると百人の中八十人は大概死亡して居ります。それから肺「ペスト」の方は黴菌には變りないのでありますが病毒を受けてから一日か二日かで發病いたします、初め非常な寒氣を感じ慄へが來まして高熱を發します其時には多く肩が凝るとか、或は胸が詰められるやうな感じがするとか、或は胸の方が痛いとか云ふやうな工合で一、二日經ちまする中に咳が出て來る、さうして咳の中に少し赤い色の血が混つて居る、それを調べて見ると怖しい程「ペスト」の黴菌が群集して居ります、それは肉眼では分りませぬが、顯微鏡では能く見ることが出來るのでありますでさう云ふやうに喀痰や唾液などが側の人の體に懸るやうなことがありまするとすぐ直樣「ペスト」に罹らなければならぬのである、疊半疊敷位患者を隔つて居つても傳染すると云ふことが試驗の結果確かになつて居ります。斯の如く病氣の有樣をくど〳〵しくお話することは私の目的ではありませぬ、唯若し熱があつたならば、成べく早く醫者に診て貰ふ、信用ある人に早く見て貰ふと云ふことを第一にお勸めしたいのであります、是で大體「ペスト」の成行はお解りになりましたと思ひます。

其次に然らば「ペスト」を豫防するのには何う云ふ風にしたら一番宜しいかと云ふことに就てお話したいと思ひます、それで此「ペスト」の豫防法には大體二通りありまして、一は公衆豫防法で皆の者が協力一致してお上の力に依つて豫防する、即ち公の豫防法、もう一つは銘々個人々々の注意と云ふことであります此二つに分けてお話したいと思ひます。

公衆の豫防法は是は法律でちやんと定めてあります、日本に「ペスト」が入つて來ると云ふのは何時も外國から來るのでありまして、印度、香港、廣東あたりから船で積まれて來ると云ふ譯になつて居るので、さう云ふ所から「ペスト」の源を持つて來ないや

うにしなければならぬと云ふやうな注意から海港檢疫法と云ふ法律が出來て居りまして、外から船が入つて來ますと其船を能く調べて鼠がすつかり居ないやうに絶やして仕舞つて、荷物を鼠の居ない倉庫の中に入れて置きまして、一定の間其倉庫から決して荷物を出さないことにする、それで始めて有菌鼠が出ないと云ふことが確められて始めて外國から來た物を倉から出すと云ふことにして居ります。

それからもう一つ尙完全に豫防をせうとするならば印度とか、香港とか云ふやうないつも「ペスト」の流行する所に信用ある技術官を派遣して置きまして荷物を船に積込みまする時に嚴重に檢査して船に鼠一疋も積込まないと云ふことを確めて始めて荷物を積込んで、さうして我國の港に著いてもう一遍調べると云ふことにしたならば宜しからうと思ひます。即ち日本に「ペスト」の病毒が入つて來ないやうに嚴重なる規則で有菌鼠を成るべく送らぬことに注意をするのであつて、それが完全に行かないと「ペスト」が入つて來るのであります。

さうして此「ペスト」の起る時は換言すれば「ペスト」患者の出る時は必ずそれから先きに鼠「ペスト」卽有菌鼠が出るものであります。從來の流行を調べて見まするど皆さうであつて、三十四年に下關で「ペスト」患者が出ましたのは恰度暮の十二月であつたところが其年の四月に既に有菌鼠が出て居つた。三十八年に大阪にあつた時も同じやうに南區難波西神田町に初發患者の出たのは五月でありますがそれより先き同年二月に既に有菌鼠が出て居つた。

それから大正二年三年の東京の流行に就いて見まするに大正二年十二月七日に日本橋區箱崎町四ノ一の下水溝から有菌鼠が初めて出ました、それから日本橋區北新堀町、淺草區下平右工門町河淸の附近、淺草區茅町、からも有菌鼠が出まして大正三年四月まで六頭の有菌鼠が出たわけであります。有菌鼠の出るといふのは早晩「ペスト」患者發生するぞといふ豫報のやうなものでありましてその當時既に「ペスト」患

者が出るに相違ないと思つて居りました果して大正三年四月十九日になつて下谷の二長町の穀屋の谷島と云ふ處の娘が「ペスト」に罹つて斃れたのであります、さう云ふ工合に詰り「ペスト」患者の出る前には必ず「ペスト」の鼠の有菌鼠が出る、それであるから此「ペスト」の鼠が出ると云ふことは「ペスト」患者の出ると云ふことを知る警鐘のやうなものでありますで吾々はさう云ふ知せがあるので一生懸命に豫防するには鼠を捕ると云ふことを第一番にしなければならぬ、さう云ふ譯であるから、此「ペスト」のある鼠を絶やして仕舞へば先づ「ペスト」に罹ることはないと言つても宜い位で、鼠が居らなかつたなら「ペスト」に罹らない、船の中にも鼠が一疋も居ないやうにすれば荷物に黴菌が著いて居つても日本に來る間‥‥長い航海の間には死んで仕舞ふ‥‥此「ペスト」の黴菌はそんなに長く生きて居るものではないから、日本の港に著く頃には「ペスト」の黴菌は死んで仕舞ふのですが、それが若し鼠が居る時は「ペスト」の黴菌が生きた儘で日本に持つて來られるから「ペスト」病が出るのであります、それで之を防ぐには鼠さへ絶やして仕舞へば後は樂々なもので何にも心配するには當らぬのであります、それでありますから東京市に於きましても此鼠を捕る爲に非常に苦心して居ることは皆さんも御承知でせうが、年々一萬六千圓だけの除鼠費と云ふものを計上して居るやうな次第であつて、非常に澤山の金を費つて鼠を一生懸命に捕つて居ります、それで鼠が「ペスト」に罹りまするさ夜でも晝でも人を怖れず臺所に出る習慣があります、其爲に尚ほ一層臺所の邊が「ペスト」の病毒に侵される譯であります、「ペスト」を防ぐには鼠を絶やさぬければならぬ‥‥鼠を絶やす方法に就きましては衞生組合などから達しもある事であり又新聞や雜誌にも詳しく書いてあるからもうとうに御承知のことだと存じまするが、それには猫を使つても、或は驅鼠劑を用ひても宜しいし、或は又機械で落しても何んでも宜しい詰り鼠を絶やすことが出來さへすれ

ば宜い、先達て實際に工夫して鼠を捕へたお醫者の話を承りましたからそれを皆さんに御紹介致しますが、一體「空家に鼠なし」と云ふことを能く言はれて居りますが、何んでも鼠の喰ふやうな物を置かなければ鼠は決して其家には居らぬものであります、それから甲の家に居る鼠と乙の家に居る鼠は互に相反撥する性質を有つて居る、であるから甲の家の鼠が乙の家の物を食ふと云ふことは滅多にない、若しあれば甲の家の鼠が一生懸命になつて、それを自分の家に入れまいと思つて喧嘩をする決闘が始まると云ふ位に却々區劃が判然として居るものださうであります、それから鼠と云ふものは非常に鼠算と申す位で、初め二疋のものが四疋になり、八疋になり、それが一年の中には實に澤山な數になるのであります、さう云ふ風に澤山に殖へるべき筈のものがさう一軒の家に居らないと云ふのは矢張り五人の家内であれば臺所に溢ばれる物も定まつて居るから、さう云ふ工合に五疋も十疋も二十疋も居ると食物が足りないので空腹じくつて耐らないから自分の子供と言はず親と言はず喰殺して仕舞つて自分の餌食にします、さう云ふことをする爲に一軒の家には大概定まつた數しか鼠が居りませぬ、それで重もに臺所が鼠の好きな物が出て居るが、臺所に若し鼠の喰うやうな物が米一粒でも、芋一切でも、何んでも一つも臺所に置かないやうにしたらば何うかと云ふ考から先きのお醫者さんが女中に嚴命して流し口に一つの袋を下げさせまして、流しから流れる物は一旦此袋を通して行かなければ流れないやうにした、それ故に溢れた者は一切袋に殘つて居る、さうして溜つた物は蓋のある函の中に入れて置くやうにしたので、それまでは盛んに天井の方で荒ばれ廻はつて居つたり、勝手にも何時も二三疋位宛居つた鼠が食物が無くなつて空腹で耐らないものですから白晝でも臺所に來て料理をして居る所なぞにちよろ／＼鼠が出て來まして人間の居ることに氣が付いて何も取らないで引込んで仕舞ふ、さう云ふ風にしまして鼠は非常

に飢へて居るに違ひないと見た時に、始めて鼠落を用ひました、そういたしまするを見て居る間に鼠落に懸るさうである、さう云ふ工合にして五日間の中に十八匹を一軒の家で捕りまして、小川町の警察署に持て行きましたら、大層餘計鼠が捕れましたと巡査から褒められたさうですが、成程さう云ふ工合にしたら一時に鼠を餘計捕れるであらうと思ひます。斯様にして鼠を除くと云ふことは豫防法の第一義であります、又其外今日個人の豫防法としては身體を清潔にするとか、衣服を清潔にするとか、襤褸、若くは綿のやうな物に注意すると云ふことは御承知だらうと存ずるので、別段御爲めになるお話は致しませぬが、一般の衛生上に御注意をなされば宜いので、要は「ペスト」を絶やすには鼠を捕りさへすれば腺「ペスト」を防ぎ得るものであると云ふことを確乎り御承知下さればそれで私の話は充分であります。甚だ詰らぬことを申上げまして御清聽を煩はしました。

大日本婦人會同盟を起すべし

ドクトル　三田谷　啓

我邦に存する大小の婦人會の數はこれを合せると中中澤山あることであらう。然るに今日にありては其無數の婦人會其ものが相互に連絡なき爲め事業をなす上に於て少からぬ不便がある。思ふに今日の我邦に於ける社會狀態は大に婦人の社會的事業を要求して居る。社會生活が複雜になればなる程婦人の力を要することは申すまでもない事である。

現今我邦に存する婦人會は澤山あるにしても其目的は凡そ左記のものに過ぎぬと思ふ。

一、精神に關するもの。(宗教、風俗等を含む)
一、身體に關するもの。
一、經濟に關するもの
一、法律に關するもの。
一、慈善救濟に關するもの。

婦人問題の増加

婦人問題は文明の進むにつれて増加する。この時に方り多數の婦人會が同盟して同盟會と稱するものを組織し重要なる婦人問題を講究するやうにすれば各個の會が各個にやつて居るに比べると餘程利益は大きいのである。

獨逸の如きは今より二十餘年前(一八九四年)に既に獨逸婦人會同盟を組織して居る。これに五十二個の團體が屬して居る。この五十二個は二千三百六十二個の婦人會から成立して居るのである。その外直接に此同盟會に加入して居る婦人會が二百九十程ある。其會員數の全體は五十萬を算すると言ふことである。要するに婦人問題は社會問題中重要なものゝ一つである。そしてこれは一方には婦人自個の爲め、一方には社會の爲めに起る問題なのである。

我國は今や社會問題が澤山重なつて居てまだ手のつけてない部分が餘程多い。例へば單に慈善事業だけを見ても其範圍が廣い割合に手がつけて無い。此方面にも婦人の協力的事業を必要とするのである。

婦人會同盟の急務

獨逸の國民が何か事業をなすに方り著々として著しく發展するのは組織的才能に富んで居るからである。多くの團體が相統一されて同じ方針で進む場合に其の業績の擧がることの著しいのは當然である。

今日の我日本に於ては婦人會が宗旨とか系統とか何だとか言ふ些細のことに拘泥されて居るべき時でない。速に全國の婦人會が同盟して一つの大きな團體となり、相統一して進めば其結果は實に見るべきものがあると思ふ。

婦人會の同盟は各種の目的を有するものを相統一して我國の婦人問題を考究調査し事業を進捗するのである。今日の如く相連絡する所なければ事業の進捗に大なる缺陷を生ずることは當然のことである。

今日は內地のことのみならず。日本婦人が進んで世界の婦人が何をなしつゝあるかを研究するときである。――個人的にもまた社會的にも――

大日本婦人會同盟の方法

同盟は一定の會員數を有せる全國の婦人會が加入して一の同盟團體を組織することである。而して同盟會の本部には會長其他の役員を定めて全加入婦人會を統一するのである。加盟婦人會は一定の會費を納めて同盟會の經費に當てる。同盟會は雜誌又は新聞を發行して全加入會の會員に頒布し、何れの婦人會が現に如何なる方面に活動しつゝありや等のことを報道する。每年總會を開き各加盟會から代表者を出し、諸種の婦人問題を討議し、一方には輿論を起こし、一面には政府に建議する樣なことも行ふやうにありたい。斯うすれば日本の婦人會事業は餘程發展するに都合がよいと思ふ。

熱心なる主唱者を要す

順序として先づ東京婦人會同盟と言ふ樣なものを造つてそして續々他の府縣に及ぶと具合がよいと思ふ。一足飛びに大日本婦人同盟會を造ることは一寸困難である。自分は獨逸の婦人會の活動振りを見て成る程これでなければならぬと深く感じたことがあつた。

そこで今日は婦人の中で熱心な主唱者があれば同盟會は出來ると思ふ。情實や、階級にからまれて居ては日本の婦人は實際頭の上るときはないと思ふ。今日は日本の婦人が一舉して世界の婦人にならねばならぬ時代である。戰爭で名を得た日本は世界の人が日本は强い國と思つて居るが、日本の婦人を見る事は迚も我等が滿足する程度に達して居らぬ。此點は實に日本婦人が大に顧みなければならぬ點である。

日本婦人の眞價を發揮すべし

日本婦人には日本婦人の特色がある。美はしい特色を捨て西洋の惡風に代えることは愚である。が併し日本婦人が廣く世界の文明に著眼しこれを日々の生活に徵すれば捨てるべき日本在來の惡習慣も非常に多い。又世界の婦人から學び得る點も少からずある。高尙な學術のみを言ふのではない。實際生活の

問題である。實際生活は一面から言ふと婦人の生命とも考へ得らるゝものである。日本の婦人が日本婦人の眞價を現はすために一層研究し、調査し、努力して貰ひたいと思ふのである。日本の婦人問題に就ては聊か私見もあるがこれは婦人方の研究に一任して佳いと信ずるので只同盟會の成立を切に希望して止まないことを告げて置きたいと思ふ。

盲腸炎に就て

醫學士　志田義三

盲腸炎と云ふ病名は近來は大抵の人が知つてゐる、つまり屢〻起る病氣であると云ふ證據である。實際に多いものである。それだから玆に一寸御話して置いたならば、或は役に立つやうな事もあらうかと思ふのであるが、然しこゝに盲腸炎と云ふのは舊名或は俗名のやうなもので、今日の病理學上から云へば、この中には蟲様突起炎、盲腸周圍炎、その他この近所の種々な急性或は慢性の焮衝が含まれて居る。然し孰れも似たやうな病狀になつて來るので、その治療法も從つて餘り大した變りはない、實際は醫者にも確かな區別がつき難いことがある位のものであるから、矢張馬も驢馬も騾馬も單に馬として取扱つて、極大體の手綱の持方だけを御話するのである。

盲腸と云ふのは小腸が大腸に移つた處で、腹の上から云へば丁度臍の右に偏て少し下つた邊に當つて居る、而してその盲腸には蟲様突起と云ふ鉛筆位の太さの、長さは種々であるが普通二三寸位の豚の尻尾のやうなものが附いて居る。この蟲様突起と云ふものが炎症を起すことが多い。通常盲腸炎と稱するのは大部分この蟲様突起炎と云ふものゝことである。或はこれが始まりで、それから眞の盲腸炎又は盲腸周圍炎などゝ云ふものになるのが普通である。何う云ふ譯で此處に炎症の起ることが多いか、卽ちこの部分に熱を持つて、腫れたり痛んだりすること

が多いか、つまり蟲様突起炎或は盲腸炎の原因如何と云ふ問題になると、これには相當の理由がある。これはこの蟲様突起と云ふものは前に述べた通り盲腸に續いてゐて筆の軸ほどの腔が通つて居る。所でこの蟲様突起と云ふものは、今日の人間の身體に取つては別に用の無いものになつてゐる、これから幾萬年の後には自然に無くなつて仕舞ふものであらうと思ふ。それで小兒の時には何か用ありげに腔も相當に廣いが、壯年になれば既に狹くなり或は一部分塞がり、老人になれば一層著しく變化するものである。盲腸炎は經驗上、又統計で見ても十歲以下の小兒には稀で、十五歲から三十歲位のものに多く、老人には又少なくなる、これは今云ふ所の蟲様突起の內腔の關係があらうと云はれて居る、即ち蟲様突起の內の分泌物が自由に排泄される間は別條はないが、その一部分が狹くなり又は塞がつたりして分泌物が溜まり、或は腸の方から糞便などが這入つて行つて仇をすると焮衝が起るのである。老人にこの病氣が稀になると云ふのも、老人の變化の爲に內腔がつぶれて仕舞ふとか、分泌物なども出なくなるからであらうと思はれる。兎も角も炎症を起し易いものである。而してその內腔を直接狹くしたり塞いだりする原因は何か云ふと、蟲様突起が曲つたり捻れたり、癒著たり、內が腫れたり、又は糞石、果物の核、寄生蟲、魚の骨などが內に這入つて、刺戟したり閉塞だりするのである。そこに惡い黴菌が行つて手傳をすれば尙ほ炎症が起り易いわけである。その他にも種々の原因、誘因があるらしいが、大體主な原因は斯んなものである。

次に盲腸炎は何んな風に起つて來るか、即ち症狀の概略を云ふと、大抵は突然腹に疼痛が起る。前から多少食慾がない、胸が惡い、通じが惡いと云ふやうな消化器病の症狀があつて、時としては惡寒がしたり、熱が出たりして、それからこの疼痛の始まることもあるが、多くは今まで何事もなく全く健康であつたものが急に疼痛を訴へる、或は夜中に疼痛が甚

しいので眼が醒めて、診察の結果盲腸炎と云ふやうな場合も少なくない。その疼痛は何處に起るかと云へば、前に述べた所謂盲腸部で臍と右側の腸骨の間の邊である、尤も時としては臍の周圍或は左側腹又は胃の邊に疼痛を覺ゆることがあるけれども、後には必ず下腹の右の邊に疼痛が定まつて來るのである。而してこの疼痛は手で壓へても緩解にならぬ、却て疼痛が強くなる、咳嗽をしても脚を動かしても響く、それで病人は自然右側を下にして股と膝を曲げて靜にしてゐるやうになる。その疼痛のある邊を觸つて見ると内方に硬い物があるやうに感ずる、これは單に筋が攣縮ためもあるが、實際に蟲様突起或は盲腸部が腫瘍のやうに腫脹れるのである。熱は殆どないやうなこともあるが、二三日間三十九度乃至四十度位に昇るものである。而して通常は二三日で熱も下り疼痛も輕くなつて、一週間内外で治癒する、これが先づ普通である。若し四五日過ぎても熱が下がらず、疼痛が漸次增して來るやうなれば、これは腫瘍になつた部分が化膿み、焮衝の擴がつた證である、性質が惡い場合には、其の部分が破壞されて孔があき、腹膜炎を起して死ぬる。

盲腸炎の豫防には如何なることを注意するかと云へば、先づ骨や果物の核などを嚥込まぬやうに、成るべく不消化物を避け便通をよくすると云ふ位のことであるが、斯様なことは特に盲腸炎の豫防法などと云ふ程のことでもなし、且つそんな事に時々氣をつけたとて、元來蟲様突起と云ふものが炎症に罹り易いもので、而かも生理上には別に用の無いものであるから、眞の豫防法としてはこれを切取つて仕舞ふに限る、屢々再發する場合には是非取つて仕舞はなければならぬ。

盲腸炎が起つたならば何うするか。實際盲腸炎であるか無いか、又如何なる種類のものであるかと云ふことは元より醫師の診察を受けなければ分からぬことで、その治療法も全然醫師の指圖に待たなければならぬことではあるが、只自分又は病人の周圍に居

る人々の注意すべきことは、盲腸炎の疑のある病人は、先づ仰臥位になつて靜にしてゐる。兩便も成るべく靜に褥中で便器を用ひてするやうにする、この安靜と云ことが一番大切なことである。精神の安靜も必要である、適當に治療さへすれば數日で治癒すると思ふて、醫師に任かせて安心して居るが宜しい。

次に食物は初の一日二日は絶食しなければならぬ、渇けば氷片を口に含み或は曹達水で含嗽する位で我慢しなければならぬ、病狀に依ては醫師は二日目或は三日目位から牛乳、「ソツプ」、重湯などを用ひて宜しいと云ふ、それから病氣の輕快なるに從つて漸次固形食に移るのである。この規則も嚴守しなければならぬ。

それから茲に一つ六ケしい問題がある、と云ふのは、この盲腸炎の治療法に就ては、今日の醫學者間には二派あつて、一方の人は盲腸炎と云ふものは初の間は性質の善いものか惡ものか一寸鑑別がつかない、いよ〳〵性質が惡い、これは何うしても手術をしなければならぬと云ふやうになつてからでは、どうも手術の成績が好くない、それで蟲様突起などは最初から無い方が良い位のものであるから、診斷が確定したならば直ちに外科的の手術を施すが宜しい、さうすれば重症に陷る危險もなければ、兼ねて再發の憂もない、一擧兩得であると主張する。これが普通我々外科醫者の立脚地である。然るに他の一方に於ては、大抵の盲腸炎は適當に治療すれば百人の中八十乃至九十人は治癒する、必ずしも最初から腹を開かなくとも緩和な療法で大部分助かるのであるから一々外科醫の御世話にならなくとも宜いと云ふ、內科醫者は多くこの説である。

斯うなると病人は一寸迷はざるを得ない、どちらにも相當の理由がある。それでこの兩極端の間に置かれた病人は、自然折衷説を採るやうになる利口な實地醫家も同様で、先づ最初は溫和な內科的治療を施し、それで何なく治癒すれば宜し、若し危險と見れば外科醫から苦情の出ぬ位速にすかさず外科手術

を勸める。これが中庸の處置で最も穩當であらうと思ふ。故に病人の方でも主治醫が外科手術を勸める場合には、何時でも躊躇せずに手術を受けると云ことに承知して置くことが極めて必要なことである。實際破壞性の蟲様突起炎と云ふやうなものは內科的の療法だけでは殆ど駄目である、僥倖で一旦は治まつても必ず復た何時か起つて來て、手がつけられなくなるものである。これに反して外科的療法の方は餘程成績が良い、多少手後れになつて、このまゝで數日を經過すれば何うしても死を免れぬと云ふやうな場合でも大分助かる。それでこれは是非手術を要するものである。この外に手術を要するものは、幾回も再發する場合である。卽ち初めは良い鹽梅に五六日で治癒つたが、又一個月或は數個月の後に起り、或は數年を隔てゝ起ることがある、而して二度目は輕いとは云へぬ、第一回は至て輕かつたが第二回或は第三回の發作が猛烈で腹膜炎を起して死ぬると云ふ場合も少なくない、それであるからこの再發するものは少なくとも二回まで幸に通過したならば、餘り僥倖を期せずに適當な時に手術すべき者である。尙ほ注意すべきことは一度盲腸炎を起したものは、治癒した後も馬に乘つたり、自轉車に乘つたり、その他總て烈しい運動遊技は廢すことがある。然し一度盲腸炎に罹り、又再發し易いものであると聞くと、神經的に屢〻再發したやうな氣がしていけないものであるが、餘り臆病になるのも毒である。

熱の話

醫學士　篠原昌治

熱があるとか無いとか云ふことはよく申すことでありますが、これは人間の身體の溫度が尋常よりも高くなりました時には一般に熱があるとか又は熱が出たとか申すのでありまして、體溫が平常の通りでありますれば熱はないと申すのであります。

それでは健康の人の體溫は大凡何度位であるかと申

ますに、それは個人によつて多少の差異がありますし又朝と晩とでも異つて居りまして、一般に朝は體溫が低くして夕方になれば高くなるものでありますけれど、普通日本人の體溫は三十五度より三十七度迄の間を昇降するものでありまして、朝と晩との差異は大概一度以内のものであります時とすれば朝の體溫と夕方の體溫とが同じでありましたり、又は反對に夕方の體溫が朝よりも少し低いと云ふ様なこともありますけれど、それでも前申上げました溫度の範圍内でありますれば別に心配することはありません、然し健康體でありますれば體溫は常に三十七度以下でありまして少しでも其以上になりますれば何か身體に病氣が潜んで居るのではないか、又は何等かの病氣を發する前徴ではないかと云ふことを注意せねばなりません、例へば自分では身體に少しも異條はないけれども毎日夕方になれば三十七度四五分位の熱が出ると云ふ人がありますが、斯る人は其當時別に病氣がありませんでも將來呼吸器病などを惹起す危険がありますから常に衛生を重んじまして、體溫が三十七度以下に復するまでは充分なる注意を怠らぬ様に心懸けねばならぬものであります。

熱は種々なる病氣の時に出て來るものであります、而して病氣の最初から熱のあるものもありますし、又病氣の經過中に出ることもあります、又病氣の性質によりましては必ず熱の出るものもあり、又熱の出ることゝ出ないことゝある病氣もあり其他決して熱の出ると云ふことのない病氣もありますけれどそれは極めて少數であります。

熱には色々と種類がありますけれど、先づ第一に長く續く熱と極めて短き間だけの熱との區別が必要であります。其長く續きますものは主として腸窒扶斯結核、敗血症等でありまして、其他腦膜炎、黴毒等種々なるものも之に屬して居ります、又極く短い間の發熱と申ますのは普通吾人が感冒と唱へますものでありまして、之は急性の氣管枝加答兒、扁桃腺炎、咽喉加答兒、「インフルエンザ」等であります、

其他急性盲腸炎とか肺炎とか云ふ種類のものも之に屬して居ります。

熱の出ると云ふことは既に身體に一定の病氣がありまして、其經過中に熱が出て來ることもありますし、又身體には何等の關係もなく全く健康であつた人に急に熱が出ることもあります、前者の方でありますれば既に病氣の性質も分つて居りますし從て熱の出る原因も明らかでありまして、之に對する處置も平素から準備せられて居りますから、熱が出ましたとても別に驚くこともありませんけれど後者に於きましては全く健康の狀態でありましたものが、急に熱に犯さるゝのでありますから其熱の原因も分りませず、從て其に對する手當の用意とてもなく其際如何にすればよいかと云ふことも分つて居りませんから、患者竝に御家族の方をひどく心配させることがあります。

此急に熱が出ると云ふ場合に於きましても其熱の出る模樣は一通りではありません、突然寒氣がしたり又はがたがた齒の根が合はぬ樣に慄へてそれから三十九度より四十度又は其以上の高い熱が出ることがあります、又他の場合には少し頭が重く頭痛がして身體が何となく熱い樣に感ぜらるゝと云ふので體溫を計つて見れば三十七度少し上位の熱があると云ふ樣なこともあります、それから後は病氣の性質によりまして段々に高い熱が出ることもありますし、又左程の高熱にもならないで治癒ることもあります。

それでは熱が出た時には如何にすればよいかと申ますに先づ第一に患者を靜かに臥かせて置くと云ふことが尤も大切であります、何れの種類の熱でありましても發熱時に身體を動かすと云ふことは決してよいことではありませんから、先づ患者を臥褥の上に橫たへ可成速に醫師を招きて診察を受け其指圖によつて適當の處置を行ふことが尤も緊要の事であります。然し醫師を招きましても醫師は必ず直樣來られるときまつたものではありません、多くは診察を受ける迄には多少の時間を要するものであります。

其際輕度の發熱でありますればたとへ醫師の來られることが遲くなりましても其儘にして置て差支もありませんけれど、若しも熱が非常に高かつたり、又は患者が甚しく苦しむと云ふ樣な場合には醫師が來られる迄に何とか手當をした方がよくはないかと云ふ問題を生ずることがあります。

熱の出た時の應急の手當として先づ第一に起る問題は此際患者を冷してよいか惡いかと云ふことであります、然るにこれは如何なる性質の發熱でありましても頭部だけ冷すと云ふことは少しも差支のないことであります、其故若し熱が三十八九度又は其以上もありまして、病人が苦痛を訴ふる樣なことがありましたならば、其際必ずしも醫師の指圖を待つ必要はありませんから、速に水又は氷嚢氷枕等で頭部を冷して御上げなさい、頭部だけ冷すと云ふことは如何なる病氣の爲の發熱でありましても決して其病氣に害になると云ふ樣なことはありません、例へば普通俗間で決して冷してはならぬと云はれて居ります麻疹の樣な病氣でも熱の高い時に頭だけ冷すと云ふことは少しも差支のないことでありまして、麻疹の時に病人を冷してならぬと申しますのは、若しも病人を冷い風に當てゝ其爲に肺炎の樣な病氣を惹起してはならぬからでありまして、唯頭部だけを冷すと云ふことは決して有害のものではありません。

其次に起る問題は熱のある時に下熱劑を與へてよいか惡いかと云ふことであります、これは多くひどい熱が出て醫師にかゝる時のことではなく唯少し許りの熱で醫師にかゝる程の事でもないと云ふ時の方に多く起る問題であります、高い熱が出まして醫師の診察を受けると云ふ場合でありますれば多少醫師の來られる時間が遲いと致しましても、其迄に下熱劑などを與へる必要はありません、唯頭部を冷して靜に醫師の來診を待て居ればよいのであります、然し何か醫師の方に特別の事情がありまして、其日の内には來られないと云ふ樣な場合になりますと、矢張一服の下熱劑を與へてよいか又は與へぬがよいかと

云ふ問題が起らぬこともありません、然しそういふ場合には一般に一服の下熱劑を與ふると云ふことは何等の差支へもないことであります、例へば腸窒扶斯の様に殆んど下熱劑を用ゐない病氣でありましても、其初期に於て一回や二回の下熱劑を與へましたとて決して病氣の爲に惡しき影響を來す様なことはありません、又他の場合で少し熱があるけれど、醫師にかゝる程の容態でもないと云ふ時に一服の下熱劑を用ふると云ふことは決してさしたる危險を伴ふものではありませんから時機に應じて適宜に之を使用してもよいことゝ存じます、然し此際用ふる藥劑の種類と分量に就ては充分なる注意を要することは申迄もないことでありまして殊に小兒に於きましては、其年齢によつて藥劑の用量が相違して居りますのみならず藥劑の種類に就ても大に注意を要するものでありまして、例へば「アスピリン」や「アンチピリン」の様なものは殆んど危險はありませんけれど、「ピラミドン」や「アンチヘブリン」の様なものは少しく其使用法を誤りますれば甚しき危險を來すことがありますから、可成使用せぬ方がよいかと存じます、要するに小兒にはたとへ一服の下熱劑でも醫師の指圖なしには使用せぬ方が安全であります。

既に熱病に罹りましたならば、其病氣が何んであるかを知りたいと云ふことゝ、又一日も早く熱が下つて平溫になる様にしたいと云ふことは誰しも希望するところであります、然るに此熱のある病氣の診斷は直ちに分ることもありますけれど、又時としては中々に分り兼ねまして發熱後一週間又は其以上になりまして漸く診斷のつくこともありますし、又時とすれば遂に診斷の明らかならぬ內に治癒るとか又は死亡すると云ふ様なことも全くないことではありません、其故熱病患者があつた時に患家の方で醫師に病氣は何ですかと御聞きになりました時に醫師の方では未だ確と分りませんと申上げることは度々あります、それも一日や二日位でなく時としては一週間又は其以上になることもあります、其時は患家の

方では一週間以上も診察して居りながら診斷のつかぬと云ふのは醫師が不熟練であるからと云ふ樣に考へらるゝ人もありますけれどそれは大なる誤解でありまして、熱病は前申上げました通り直に診斷のつくものと容易に診斷のつかぬものとがありますから、たとへ一週間以上も診斷がつかぬからとて決して醫師の技術の不足の爲とは申されません。

斯る場合に於きましては、其病氣の名稱が分らぬから從て其病氣の性質が如何なるものであるか全く分つて居らぬかと申ますと決してそうではありません、たとへ病名こそ分りませんでも、醫師の方には此熱は如何なる種類のもので、又身體の如何なる部分から來るものであらうと云ふ位の事は分るものであります。斯の如く其發熱に對して大體の觀念を得ると云ふことは尤も大切なことでありまして、それによつて治療上の方針が決定するものであります、例へば呼吸器病即ち肋膜炎、肺病等から來る熱であれば患者には可成滋養に富んだ食物を與へまして、且下熱劑を與へて熱を下げる樣にする必要がありますし、又腸窒扶斯の樣な熱であれば患者には主として流動食を與へまして、下熱劑は與へぬ樣にするのであります、其故治療上の方針を定むる上に於て其熱は大凡如何なる種類のものかと云ふことを知るは大切なことでありますけれど、其病名を確定すると云ふことは必しも急ぐ必要はありますまいと存じます。

それから又熱は藥劑の力によつて下げてよいものと、又下熱劑を用ゐては却て害になるものとがあります、例へば肺炎とか腸窒扶斯の樣な熱でありますれば、下熱劑によつて一時體溫を下げますれば暫時の後惡寒がして、又高い熱が出て來まして何等の效能がないばかりでなく度々下熱劑を用ゐますれば其爲に心臟の力を弱くし、病氣の經過を著しくわるくすることがありますから一般に下熱劑は用ゐないことに致してあります、其他凡て熱病は藥劑の力によつて熱を下げさへすればそれで病氣が治癒ると云ふ

譯のものではありません、から若し熱病にかゝられた時には、一日も早く熱が下ればよいと希望するのは人情でありますけれど、又一方から考へますれば熱は出るだけ出なければ病氣は治癒らぬものとあきらめて、餘りあせらずに唯爲すべき凡ての手當を充分に致しまして靜に熱の下るのを待つが尤も賢なるやり方であるかと存じます。

育兒

哺乳兒期に於ける下痢の話

醫學士　宇都野　研

生後滿二歳以內、殊に離乳期前後に於て、一種恐るべき下痢の病氣があつて多くの犧牲者を出す事は、諸姉の熟知の事である。然しながら、肺炎であるとか、又は實扶的里、猩紅熱と云ふ様な病氣の方が、一般に恐れられて居るやうである。然しこの年齢の頃に於て、下痢のために斃れるものが、如何に多數であるかと云ふ事を知られたならば、哺乳兒期に於ける下痢程、恐るべきものは他に無いといふ事に、氣が付かれるのであらう。例へば生後滿一箇年の間の全死亡數の凡四分の三は、直接又は間接に消化器の障碍のために斃れたものであります。

斯く哺乳兒期に於ける下痢といふものは、他の時機に於けるものに比して、其價値を異にして、甚だ戰慄すべきものであるが、一體如何にして本病が起るものであるかと云ふ事を、概略知つて置くのは、育兒上極めて必要な事であります。幼少な小兒の消化器は極めて障碍され易く一定の食品に耐へ得るものであると云ふ事は、素人方もよく御存じの事であり且つ極々古い醫書などにも記してあることであつて、この期間に於ける小兒は、殊に消化に關して抵抗力が薄弱であると云ふ事が、根底をなして居るものと思はれる。

次にこの下痢と密接の關係のあるのは、榮養の方法であつて、母乳榮養の場合には假令下痢が起つても生命に關する樣な事は殆ど絕無である、即ち母乳はこの時期に於ける榮養品として、理想的のものであつて、之を以て榮養すれば、抵抗力薄弱なる消化器も、大損害を蒙る事がないのである。然るに素人方は勿論、醫師の中にも、一寸した動機で、母乳をやめさせる人があるのは、實に危險千萬な事であります。牛乳や山羊乳で榮養して居る小兒は、假令其乳が新鮮であつても、元來牛や山羊を育てる爲のもので、哺乳兒に適當せざるものであるから、如何に注意しても恐るべき下痢を起す場合があるのである。勿論この病氣は離乳期に多く、乳以外のもので、この期間の小兒に不適當なものを與へた場合にも、起るのであるが、乳以外のものを與へなかつた場合には、何時も獸類の乳で榮養して居るものに起るのである。次にこの恐るべき下痢の起るのは、毎年六月七月が最も多く其前後の二箇月(五月八月)が之に次ぐのである。而して他の月に於ては、重い下痢は極めて稀れであつて、若し起つても比較的治し易い。何故に夏期に於て本病が多發するかと云ふ事は、未だ充分にわからないけれども、此の季節に於て、獸類の乳が腐敗し易く、哺乳兒が不良なる性狀の乳を以つて榮養されると云ふ事が、一大原因なるに相違ない。然しながら、夏期殊に六、七月頃の氣候そのものが、小兒の身體殊に消化器に、不良の影響を與へて、損傷され易い消化器を、一層薄弱ならしむるものと思はれる。

元來哺乳兒が下痢すると云ふ事は、決して稀れな事でないのみならず、母乳榮養の小兒が下痢に傾く事は、可なり多い事であるけれども、其れが一々命がけの病氣といふわけではなく、勿論輕症なのが大多數であるけれども、重症のものとの鑑別が甚だ困難であつて、重症なものゝ初期を、輕症なものと區別する事は、哺乳兒の狀態に熟した專門醫と雖も、往往迷ふ所であつて、素人方に其鑑定法を判り易くお

話すると云ふ事は、殆ど不可能の事であるけれども
試みに多少の根據となる點を擧げて話さうならば、
凡そ次の様である。
輕症と云ふのは、單に下痢があるのみで、他に何等
の變りのない場合を云ふのであつて、元氣も氣分も
常の如く食慾も亢進し、安眠も出來れば、善く遊ぶ
といふ様な場合を云ふので、之等の點に少しでも
變調を呈して來たならば、重症に變ずるものと思は
ねばならぬ。一寸茲でお斷りしておくが、下痢の度
數といふ様な事は、病氣の輕重を判ずる上に於て、
あまり有力な材料ではない。子供の全體の容體とい
ふものが最も大切なのである。小兒が嘔吐を初めた
り、汎然して來る様になれば、病氣は既に深入りし
たのであつて、熱の弛張が始まり、食慾が減じて、
渇が強くなり、脈搏が頻數となつて來るのである。
更に今一歩進むと、何を與へても嘔吐を起し、嘔氣
が頻々として起つて來る。小兒は時々歎息をもらし
て、輾轉反側し、腸管の劇しく動くのが、腹壁の上か

ら見得る様になり、顏貌は無邪氣な處がなくなつて
嶮しくなり、苦悶の狀を呈し、舌は乾燥して、時々下
先を口に入れては嚙む。尿の出は極めて惡くなつて、
糞便は尿と誤る様に水様となり、腐肉臭を放つ。斯る
狀態が、あらゆる治療に反抗して持續する間に、饑餓
や衰弱が漸次加つて來て、遂に斃れるのである。斯る
場合に時々煤色のものを吐する事がある。之は血液
の變化したものであつて、極めて惡徴候である。
○○豫防としては、總の哺乳兒を母乳で養ふといふ事に
するのが一番よい。若し母乳が足らなかつたなら
ば、一回なり二回なり貰乳をするのがよい。若し母
乳の分泌が極めて不良であつて、多少の補助を受け
るのみでは、追つ付かぬ場合には、乳母を雇入れる
事にしたい。之等の何れをも行ひ得ざる場合には、已
むを得ず、牛乳を與へるのであるが、牛乳榮養を施す
際には、必ず醫師の指揮を受けて、稀釋度や分量を加
減し、新鮮な乳を手に入れる事を勉めねばならぬ。
○○療法は小兒が下痢を起した際には、直ちに醫者に診

せる事が、最も間違ひのない事であるが、其れまでの處置としては、輕症では牛乳を常よりも稀釋し、加へて居た砂糖はやめてしまふが宜しい。若し少し重いと思つた場合には診察をうける迄乳を全廢してしまつて茶や湯の冰冷にしたもののみを與へて置くがよい。

重症でも極々初期に、合理的な療法を施せば、助かる例が隨分少なくないのであるから、重症の疑が少しにても有る場合には、早速乳を廢して、醫者の指圖を受くべきである。

夏の子供等

根津茁萱

兒童は元來暑い寒いには餘り頓著しないものである、雪の降る日などは犬と子供は喜んで快活に遊戯する、暑中も燒けた沙を弄んで居る、健康な小兒は斯うした筈のものである。

成人は元來暑氣に堪へぬと云ふ人でも四十歳を超すと大抵寒氣を苦にし暑氣には比較的堪へるやうになるが、極く幼少の子供も暑氣よりは寒氣に對して抵抗力が弱い、それが稍や成長した兒童になると寒さも暑さも平氣で戸外に遊戯するやうになる。それで少しく注意すれば、夏は兒童の體育に恰好の時季である。第一に不自然な邪魔物たる衣服より免れて眞正の天賦の衣服なる皮膚の曝乾が出來る、十分の日光と空氣とを得て屍體の如き蒼白の色がうせ活々した艶が出る、のみならず運動が自由になるから全身の骨骼並に筋肉がめき〳〵發育する。窮屈な机と椅子の間に挾まれて、興味のない死文字に苦められた憐むべき小な腦は、翠滴る山野に、潺湲たる川流に、萬頃一碧、怒濤澎湃たる海邊に於て自然の大教科書に接し、非常の感興の下に終生忘れんとしても忘るべからざる雄大なる眞知識を直覺するのである。餘程の月謝を拂つても惜しくはない。此意味に於て夏は盛に子供を遊ばせ度いものである。但し子

供は衛生と云ふやうなことに就ては全く無法であるから、これは又父兄たるものゝ特に注意を要する點である。

衛生上の注意と云ふても徒らに病兒の看護法の如き事を以て健兒を煩はすのは間違である。

哺乳兒は夏季には種々の消化器病で生命を取らるゝ事が非常に多い。これを防ぐには第一に小兒の手、口を清潔にし、母親の乳房を清潔に保ち、授乳時間を正規にすることが大切である。而して縦令離乳の時期になつても秋まで母乳を續けることである。牛乳で育てゝ居る哺乳兒になると頗る細心の注意を要する、即ち牛乳そのものゝみならず牛乳罎、吸口等總て殺菌して極めて清潔に保たなければならぬ、腐敗しかけた牛乳は勿論、不潔な罎や匙を用ふれば忽ち下痢を起す、而かも母乳で育てゝゐる小兒と異つて、重症に陷り易く、治り難く、死亡するものが非常に多數である、故に甚だ面倒ではあるが、始から不自然な榮養法であるから止むを得ない、出來るだけ注意をするより外に仕方がない。尚ほ常に身體を清潔にし、なるべく涼しい處に置くべきである。

次には小學校時代の兒童であるが、都會の兒童はなるべく海なり山なりに連れて行つて活潑に遊ばせるに若くはない。避暑などゝ云ふ贅澤な怠惰者の見習をさせるのではない、全く身神の鍛錬の爲である。此際注意すべきことは然るべき大人の監督である。兒童は海水浴をするにも構はずに置けば如何なる無法なことでもやる。毎年溺死するものが少なくないこれは全く監督の不行屆からである。溺死はしないまでも、兒童は海に入るにも時間などの考はない、何時でも入る、何度でも入る、唇が紫になつて身體が慄へても水に浸つて遊んで居る。斯樣にして確かに有害である。これは豫め醫師に就て健康診斷を受け、海水浴の可否を問ひ、序に浴法の要領を聞いた上で、父兄自ら或は確かな監督者の監視の下に行はしめなければならぬ。山や野に出掛けるにも兒童のみ手放しては屢々危險な事をやる。矢張大人が一

名件はなければ、知らざる土地に在つては特に危険が多い。
飲食物に就ても水道のない土地に於て井戸或は河の水などを生で飲むのは危険である、必ず一旦煮沸して冷やしたものでなければ不可ぬ。外に出る時には水筒に詰めて持たしてやるが宜しい。削つた氷を食ふのは戒まし　なければならぬ。眞に渇を止めるには餘程多量の氷を食はなければならぬ、而して甚しい寒冷の爲に胃の粘膜が痲痺して消化液の分泌を妨げ、刺戟の爲に未だ胃内の消化を終はらぬ食物を早く腸の方に送り出してしまふ、斯様な事から胃腸を害することになる。それから小兒は果物を貪食して消化器を害することが多い、果物は煮て與へれば一番安全ではあるが、然し自然の味を失ふから生で與へるとしても、能く洗つて皮殼を剝いて食べさせる桃の如きはなか〳〵不消化である、小兒には一度に二個以上を與へては不可ぬ、それも食後にだけ與へるやうにするが宜い。
外に出る時には必ず麥藁帽子を被らせ、倘は水で遊ぶ時には耳に綿の栓をさせることが必要である。海水ならば後で鹽水を洗ひ落させる。日に燒けて黒くなるのは女の兒でも少しも厭ふ所でない。
今日は只專ら剛健なる時代の國民を要する時である。

太郎の生立（承前）

ドクトル　三田谷　啓

百六日目に太郎の話はこう云ふことであつた。アルレ、エエアイ、エレー、ヱレー、エウエーウェー、ヘー、ヘウエー、オエー、ワアーアー、ヱー、アーアー、エ、エーワ、ワイ、レー、レレー、エエエー。百八日目に初めてハハーと云ふ言葉が笑ふ時に出ることを認めた。それから二日後に次の如き活潑な言語がきゝされた。エゲー、エグレー、エゲゲー、イグレゲー、イゲー。同じ日に父は太郎の前でルヽヽ

（RRR）と言つた。太郎は先づ第一非常に驚いた顔をして笑つた。それから遂に父の云つた言葉を出そうと試みた。この試驗はその次の日にまた父から反復された。

太郎はそれを眞似てグル、ル、リ、と始終いつて居た。

百十六日目に新らしい音を出した。イ、イイー、イ、である。百十七日目に非常に強い聲でエリー、イーイーアリー、と言つた。太郎の話と笑ひとがたまたま互に結びついて居た。場合によつてはこれがまた笑いと泣きとに結びついて居た。これは丁度この月の初めに話した通りである。太郎の叫びは今では叫び泣きと云ふ方が適當である。卽ち淚は澤山出て來る。音はだん／＼低くなる。話をしてやると太郎は感謝する模樣でき〻入れるそして居る內にまた再び笑ふやうになつた。

太郎の身體を動かすことによつて彼の愉快の度を知ることが出來た。卽ち太郎は嬉しい時には手と足とを盛んに動かして笑ひ且つ話した。

百五日目に太郎は活潑に彼れの裸の足を枕の上に乘せた。また握む運動が餘程烈しく成つて來たけれども失敗するのはしば／＼であつた。百日目の事である。太郎は手、毛並に太郎の側にある物を握んだ。百二日目に太郎は太郎の母の毛を握つて放さないので、太郎の父はこれを放すやうにしなければならぬ程であつた。太郎の側にある罎は太郎が常に握りたがる物の一つであつた。此罎の中には果物の汁や蜜の水がはいつて居たのである。其外太郎の手は拳を作つて居たのである。

心地のよいために脊伸びをしたのは初めて百七日目に認めることが出來た。卽ち太郎は夜寢から醒めて乾いた著物をきせられた時に兩方の腕をずつと高く擧げた。

太郎は音響によつて喜びさては笑を催すこともあつた。例へば太郎は九十五日目に廻轉オルガンを奏する時に笑ひ且つ驚いたやうな顏をした。其他ピアー

ノ、唱歌、口笛のやうなものは太郎が又非常に喜ぶものであつた。太郎はこれを聞いて大抵は何か言つた。そしていつでも笑つて居た。しかし紙を破るやうな音は太郎は好まなかつた。

太郎の注意力が非常に緻密であつた事は太郎の室の中で行つたり來たりする音を注意する事であつた。即ち太郎の眼は活潑に彼方此方を見廻した。殊に太郎は太郎の母の姿を見送るのが常であつた、斯の如くにして太郎の活潑な小さな眼は、いろ〳〵の物を見るのであつた。即ち太郎の眼は働いて居る物質、きれ、振子のある時計、兩親の頭等を見守り、且つ好んで光のある方を見るのであつた。九十五日目の日記を見ると次のやうな事が書いてある。太郎の眼は非常に活潑に輝いて若し誰かの顏が近くで見えると太郎はこれに注意して笑つて、手でこれを摑まふとした。同時に又彼の身體を少し高くもちあげた。太郎が一半乃至二「メートル」の距離にまで太郎の父を見守つたのは、丁度百三日目の事である。其間に太郎は非常に色々の物を見た。殊に好きな乳を飲んで居る時でも何かを見るために中絶するやうな事があつた（百八日目）、同じ日の夜太郎が乳を飲んで居る時に燈を見せたら其燈ばかりを見て居たので、終には乳を續けて飲ませるために燈を外に持つて行かねばならなかつた。

太郎は誰か他人が自分の室へ來るとよくこれに注意して若し乳を飲んで居る時であればこれを止めて其人を見た。其人が室を出てしまふと太郎は笑つて獨り言を言ひ乍ら初めて再び乳を飲みかけた。

九十八日目に太郎の父が指を俄かに太郎の目の前に持つて行つたら初めて眼を閉ぢた。この事は今日まで見られなかつたのである。太郎の非常に驚いた有樣を彼の顏に於て見たのは太郎の小さい姉が泣いた時であつた。又太郎の非常なる不思議そうな顏つきを見たのは湯に入つて居る時に初めて冷たくされた時であつた。然し太郎は其時に何も言はなかつた。

（以下次號）

家庭衛生

夏の飯

莊司秋次郎

『世中はいつも月夜に米の飯』とか、謠好は亦『熊谷に米の飯』とか云ふて、日本人には米の飯ほど美味ものはないやうである。日に三度の食事は主として米であるが、珍らしい御馳走には强飯、鮨、餅、萩の餅、いづれ米ならざるはない。

西洋人は一般に麥で以て所謂麵麭を製して吾々の米の飯同様に食ふて居る。矢張少しく空腹になれば『我等に麵麭を與へよ、然らざれば……』と喚めくのであるが、常食、主食物として飯と麵麭と孰れが優つて居るであらうか。これは一大問題であつて、第一に地味、風土、氣候上の關係より耕作の難易適否、その他の經濟、榮養等非常に廣い範圍に亙つて研究した上でなければ輕々しく答へることは出來ないが、一寸考へた所では、少なくとも今日の狀態では米の飯と云ふものは麵麭に比較すると榮養上からも經濟上からも何れの點から見ても甚しく割の惡い、この上もなく馬鹿〱しい主食物のやうに思はれる。

我邦の貧窮なる農夫は、その幼稚なる神代ながらの耕作法に依て一年の大部分はその瘦田の泥を掻いて米を穫んが爲に苦しむで居るのである。而かもその收穫時は每年二百十日、二百二十日などゝ云ふ定規的の暴風雨に襲はるゝことになつて居る。一種の冒險事業と云はなければならぬ。實際每年これが爲に泣て居る。而してこれを食用にするまでの手數と云ふものは非常なもので實に粒々辛苦の結晶である。扨て斯様にして漸く食用に供し得ることゝなつてから、これを精白するのが又容易でない、一大事業である。いよ〱精白米となつてから、これを飯にす

るまでの手數がまたなか〱大變なものである。それも戸毎に毎朝これを淅いで別々の竈で炊くので、女中の主な仕事はこれである。實に非常に貴い食物である。

而してその出來上つた米の飯なるものは、實際榮養上幾何の價値のあるものであるかと云ふに、水と澱粉に過ぎない。今試に米と米飯小麥粉との分析を比較して見れば斯うである。

	水分	蛋白	脂肪	含水炭素	灰分	百瓦ノ熱量
米	一二・三	六・五	〇・三	七六・九	〇・三	三五四
米飯	七二・五	二・三	〇・一	二三・八	〇・二	一一一
小麥粉	一一・四	一〇・七	一・七	七〇・九	〇・八	三六二

これで見ても米飯と云ふものは大部分は水で、その次は含水炭素即ち澱粉であるが、これも米の七六・九、小麥粉の七〇・九に對して僅かに二三・八である蛋白質は米の六・五、小麥粉の一〇・七に對して僅かに二・三である。脂肪は米の〇・三、小麥粉の一・七に對して僅かに〇・一である。要するに必要な榮養分は甚だ少量である。米の時は大分宜しいが、それに非常に手數をかけて、榮養分を無くして飯と云ふ水と澱粉をだけにするのである。何と馬鹿氣たものではあるまいか。

水と澱粉で、三分の二は水、三分の一は澱粉、先づ糊である。斯樣な糊だけで以て榮養を充たすには餘程馬鹿喰をしなければ間に合はぬ理窟である。東洋の豪傑の腹ばかり膨れて居るのはこれが爲であらうと思はれる。更に近來一派の醫學者は彼の脚氣と云ふ病は米の中毒である、或は米飯のみに依る榮養上の不平均から起るのであると唱へて居る。未だ卒に信ずることは出來ないが、斯樣な說の起るのも、尤な理由である。

尙ほ榮養上麵麭に比して米の飯の劣つて居ることを論ずればまだ〱有るが、今日はそれは略して、單に夏季に於ける米の飯の不都合を述べて、一刻も早く斯樣な厭な物を止る運にしたいと思ふのである。何の家でも一軒毎に毎朝女中が暑い思をしてプウプウ煙を立て飯を製造する、同じく味噌汁を製する、

漬物を出す。これだけの御馳走を整へるのに專門にかゝつて物の二時間もかゝる。若し麺麭ならば、咖啡でも沸かしてさへ置けば、幾人の家族が何時に起きやうと隨意に食卓の上で簡單に立食が出來る。この飯を食ふ事になれば一々それ茶碗、それ御椀、それ小皿、御茶だ、御湯だと御給仕つきの飯事で大變な騷動である而してフウ〳〵熱を吹きながら漸くのことで濟ますと、又々女中さんの後片付けが容易な事でない、日に三度づゝこの大事業をやる、これだけでも迚もこの御國は富みやうはないと云ふやうな氣が致すのである。此邊の不經濟な不都合な點も考へればまだ〳〵あるが、それも略して、差當り夏分に衞生上不都合な點を擧げれば、この粒々辛苦の結晶で、女中の脂汗で製造された貴重な米の飯は、何人も篤と御存知の如く、夏は直ぐ腐ることである。成程、竹細工の飯櫃に入れるとか、簀蓋をするとか拭巾をかけて蒸氣を吸收させるとか、なるべく涼しい處に置くとか、有ゆる工夫は致しますが、それでも一日貯へて置くことすら怪しいのである。前にも云ふ通り大部分水から出來て居る糊で、温いから黴菌の培養基として至極適當した物である、これほど腐敗易い物はない。それでも一日三度製造することは、流石に面倒であるから、朝に炊いた物を晩に食べる、少しく腐敗臭があるが勿體無いと云ふわけで水で洗つて食べる、下痢位起すのは別に不思議はない。

更に厭なことは、矢張この米の飯を辨當にする。幸ひ小學校には夏休があるからまだ宜しいが、小兒が斯樣なものを晝食にするならば實に由々しき事である。

主食物として米の飯の厭なものであることは大概この位にして置いて、夏季に於てこの不都合の隨伴現象として起つて來る又厭な事が多々あるが、その一例を擧げるならば彼の著物の糊付けである。

前にも云ふ通り、麺麭ならば分量も能くわかり、縱令殘つたからとて別に困りもしないが、飯と云ふも

のは毎日炊いて居つて毎日調子が狂ふ。『家の女中はどうも物の加減と云ふことを知らないから困まる、こんなに御飯を炊いて何うする積なんだらう、これでは年中お冷を頂かなければならない。もう少しお氣をつけなさい』と御小言が出る。次の日には又『馬鹿と云ふ者は仕方の無いものだ、一體何人で召上がるのだか考へても御覽、これではお前、御晝にも差支へるぢやないか、他の物は何うでも宜いけれども御飯だけは十分なければ不可ませんよ、若し御客樣が御一人でもあつて御覽なさい、大狼狽をしなければならないぢやないか……』と叱られる。然しこれは今日の食事法では誰が飯炊きになつても斯うである。そこで夏分は少し剩ればドン／＼腐る。然し廢物利用とあつて、この腐つた飯に更に水を加へて腐らし、これを著物に粘けるから誠に重寶である。だが此も少し考へ物である。

汗になつた浴衣を洗濯する。洗濯と云ふのは衣服に著いた汗や垢を落して淸潔にするのが目的らしい。然るに腐敗した飯を糊にしたものは如何に考へても淸潔な物とは申しにくい。淸潔にする目的で洗濯した物を、不潔物に浸すと云ふのは、今日の論理學ではトンチンカンの仕方のやうに斷定せざるを得ないのであるが、敢て怪しまない樣子である。『コレ今日洗濯した私の浴衣は何處に在るか』、『ヘー、彼處にあの通り立てかけて御坐います』と云ふ調子で、非常に強く糊で固めて乾鱈のやうにする、それに唾液水を吹掛け、足で蹈つけて、麻上下のやうにして肌に著かぬで宜しいと云ふて喜んで著る。斯樣な不快な洗濯法が氣に入ると云ふのは確かに昔から慣れ來つた異樣の惡習慣で、不快なるべき皮膚の感覺も快しとし、不潔なるものも淸潔と考へる一種の錯覺であらうと思ふ。既に斯樣な惡癖が附いたものは致方がないとしても、憐むべきは小兒である。不潔物を以て乾固めた衣服を著せられて、軟い皮膚を擦られ、實際赤くなるのを見る。行水をした後で、この糊で固めた著物を被せやうとする時には、何の小

見でも厭がるのである。それを「さつぱりして幾程好いか知れない」などと自分の惡癖から割出して無理に被せるのである。これは浴衣のみでない、蒲團の上敷であらうが腰卷であらうが苟も肌に觸るゝものは悉く、腐敗した糊で乾固めなければ氣が濟まぬのである。立入つて調べて見ないから確かな事は言ひかねるが、夏季の皮膚病はこの惡習慣に依て起り或は增惡せしめられることが多大であらうと推想される。

尚ほこの米の飯と云ふものは炊き立てからして一種の臭氣がある、これは寄宿舍の食堂のやうな多數の人が同時に飯を食ふて居る處に外から這入つた場合に能く分かるが、特に夏は甚しい恐らく幾ら飯好きの人でも、ウッと氣息が詰まるであらうと思ふ。これは又傳染病媒介者の旗頭たる蠅が非常に好きで、飯を食ふ處には直ちに飛んで集る。飯粒の落ちて足で蹈み塗られた疊、前述の腐敗糊づけの浴衣の汗に濡れた處などは蠅の集合所の目標となる。次にはペストの本尊たる鼠が又この米が好きで、飯も好きである。米や飯のある臺所には鼠は如何なる事をしても侵入するのである。

斯樣に考へて來ると米の飯と云ふものは經濟上からも榮養そのものに就ても、將た衛生上から云ふても少なくとも今日の狀態に於ては、これを主食物として居ることは頗る敬服の出來ぬものと思はれる。この事に就ては私は米の飯を斯んな事をして食ふて居る以上は到底これだけでも日本國は立ち行かぬと迄慨歎して居る者であるが、今日は僅かにその一端を茲に漏らして、せめて夏の間ばかりでも麵麭を食ふやうに勸告するのである。

臆病と無謀と大膽

凡そ戰に於て臆病なものは勝つことが出來ない、無謀なものは負ける、大膽なるもの獨克く勝を制するのである。これは單に人間同志の戰鬪に於てのみ然

るのではない、人間と病魔との戰鬪に於ても同樣である。

例へば人口二百萬の大都會に於て一名の疑似虎列拉らしきもの發生したりと聞けば忽ち腹がグウ〱鳴つて何となく嘔氣がある。某の工場に於て工女一名「パラチフス」に罹れりと聞けば卽ち額に手をあて背中に熱感ありと訴ふる如きは、これ確に臆病者の常態である。これ既に自らそれだけ神身を害したのである。斯の如き人は一旦眞に病原物の襲ふ所となれば必ず負ける人である。斯の種の人は又得て迷信に陷り易い。或は加持祈禱或は禁厭乃至灸點等に依て以て傳染病を免れやうなどゝ企てる、愚の骨頂である、傳染病に罹り易く、罹つて世に蔓延せしめるのは大抵この類の人物である。この類の人々が子供を育てることになると、冬は全く麹か納豆を造るやうに飽くまで温かに包むは勿論、暑中でさへ湯に入つて能く温まらなければ子供は風を引くなどゝ云ふ、温熱に對する迷信を持つてゐるのが常である。飮食物にしても子供には必ず熱飯を食はせねば氣が濟まぬ、かと思ふと氷水などはガブ〱と飮ませて喜んで居ると云ふ調子で、少しも根本的の衞生を解してゐるのではない、全く迷信的「ヒステリー」的の感情に支配されて子供を育てるのである。斯樣な子供は孰れも抵抗力の弱い、トンチンカンな臆病衞生の惡習慣がついて居る。若し子供が病氣にでも罹れば醫者が一番治療に困るのは此の流儀の母親である。醫者の言ふことが信じられない、自分の空想で以て勝手な理窟を捏ね上げて居るから、決して醫者の意圖は實行されないものである。兎に角この衞生的臆病者は臆病と云ふ精神の病があるものと云ふて差支がないもので、次に述ぶる衞生的無謀者よりも始末の惡いものである。これを治するには先以て腦神經系統の強健を計り、衞生の根本原理を會得せしめ、更に一般の精神修養が必要である。

次に例へば傳染病流行時に井戸の生水を飮むは危險であると云ふことを聞きもし、知つても居るが、何

に少し位は構ふものかと云ふてツルベ飲みをやる。或は今日の藥品は昔の藥物と異つて僅かに分量を誤つても危險を來すと云ふことを知つてゐるのに、私は普通の人の分量位ではなか／＼利かぬなど丶妙な強がりを云ふて一服のむべき所を二服も一度に飲む而して往々死にそこなふ。これが即ち衛生上無謀者の行き方である。前の臆病衛生は主として婦人の陷る所であるが、無謀衛生は兎角男子の得意とする所である。この性質の人は矢張その子供に對しても無法である。哺乳兒に冷水摩擦を施して強くしようと企て、漸く二三歲の小兒に果物などは殼ごと食べさせて平氣である。炎天にも跣足で帽子も被らすに戶外で遊ばせる、然しこの流儀の人は少しく眞の衛生の學理と云ふほどでなくとも僅かに人間の身體に就て正當の智識を得れば容易に過を改め、適當の衛生的生活に移り得る人である。

最後の大膽なる衛生と云ふのは、例へば近所に虎列剌患者が發生したと云ふやうな場合にも、虎列剌菌は消化器の道より這入るものであると云ふことを承知して居つて、一切の飲食物は必ず煮て食べる、飲食器物には決して蠅を寄せつけない、更に虎列剌菌は酸に對して弱いものであるから、適當に稀鹽酸「リモナーデ」の如きものを飲料とすれば少々虎列剌菌が誤つて胃に行つても殺せる理であると云ふ位な、簡單な道理をわきまへて實行する。斯の如くにすれば決して虎列剌に侵されることはないと確信して居るのである。それでも尙ほ罹るやうなことがあれば何處にか豫防法の手ぬかりがあるので、自分の粗漏であるから致方がない、天を怨まず人をも咎めず、所謂人事を盡して天命を待つと云ふ覺悟であれば、常に泰然として事に處することが出來る。決して迷信の恐に陷り、自ら神身の弱味を作ることもなく、飛んで火に入る如き暴擧を敢てすることもないのである。個人の衛生は斯くあらねばならぬ。

古羅馬の賢人セ子カは斯う云ふた。

『苦痛に對する恐怖の中に生活する者は、必要以

上に苦む者である」と。病氣に對してビク〳〵するものは、衛生上必要以上に患ふる者である。

蚤除法

一、座敷を淸潔にさへすれば蚤などは居ぬものである。何處から何處まで掃除が行屆けば蚤はゐなくなる。これが根本的の蚤除法である。

一、蚤を殺すには石油が一番宜しい、千倍ほどの水を混ぜた石油の乳劑に蚤を入れるならば忽ち死んで仕舞ふ。實際に應用するには石鹼水に石油を混ぜて蚤の巢窟に撒布すれば可い。

一、蚤は痲醉狀態になるだけで死にはせぬが、除蟲菊の粉を撒布して、蚤が痲醉した所を捕へるのも一法である。

一、此他硫酸苛性加里の如き腐蝕藥が蚤の身體につけば死ぬ、尙ほ亞硫酸、靑酸、二硫化炭素、一酸化炭素等の瓦斯で以て窒息させることも出來るがこれ等は蚤よりも人に危險になり、且つ經濟的にも應用上にも不便であるから實地に用うるわけには行かぬ。

一、西洋皿に石鹼水を盛り、中央にコップを置き、共に水を入れてその中に石油を注ぎ、これを蚤の多い室内に置いて夜間その石油に火を點けると蚤はその光に牽かれて飛込んで死ぬると云ふことである。

一、牀の上に「ナフタリン」を撒き新聞紙を敷きつめて疊を入れゝば蚤は出ぬと云ふことである。

一、明礬を疊の下に撒き、壁紙も敷紙も明礬を塗り「シーツ」も明礬に浸して乾かしたものを敷けば蚤は出ないそうである。

一、就寢前に樟腦を「アルコール」に溶かしたものを二三滴手の掌で身體に塗りつければ夜間蚤に喰はれずと云ふ。

食物の中毒

茸類或は河豚などを食して中毒を起すことのあるのは珍らしくもありませぬが、其中は種々の食物に由て中毒を起す場合が多い。これは初から其食品に毒を含むでゐるのではなく、腐敗分解を起す間に種々の毒性の物質が出來るのであります。御祝事の折詰などに依て多數の人が一時に中毒して吐瀉を起すことのあるのは大抵これである。多少臭氣があるやうなもの又味の變つてゐるやうなものを敢て食れば、これは既に自然の忠告に逆ひて非衞生的の事をするのであるから中毒しても自業自得と謂はなければなりませぬが、實際食べるときには少しも氣がつかず、胃或は腸に至て消化の途中で毒分を生ずる場合があります。

斯樣な場合には大抵嘔氣、嘔吐、頭痛、眩暈、腹痛、下痢等の症狀が起り、甚しい場合には四肢が冷たくなつて脈も止つて仕舞ふことがあります。

これは食物の中毒らしいと氣がつきましたならば、先づ第一に胃から外に出して仕舞ふ工夫をしなければなりませぬ、卽ち手指或は鳥の羽のやうなものを咽頭に入れて嘔吐するやうに致します。若し出なければ一杯の「コップ」に一瓦ほどの硫酸銅を溶かして五六分間おきに一口づゝ嘔吐するに至るまで飲む。或は又微溫の鹽湯を多量に飲むで嘔吐を促します。而して少しく葡萄酒のやうな酒類を飲むで醫師の來るのを待ちます。

若し既に稍や時間を經て胃から食物が腸の方に行つて下痢を起しさうな場合であれば蓖麻子油二十瓦ほど頓服して下して仕舞うやうに致します。中毒の場合には身體の自然の妙機に由て自ら嘔吐を起し下痢を發して毒物を體外に排除するやうになりますが、つまりこの自然の働きを人工的に助けるのであります。故に斯樣な場合に嘔氣があるから嘔氣止の藥を用ひ、又下痢しさうだから下痢止の藥を用うると云ふのは全く誤つた考であります。一刻も早く醫師

の手當を受けると云ふことは申すまでもないことであります。

抄録

食物の集配に成功した婦人

（愛國婦人第三二五號）

ケアリイ嬢といふ倫敦の一婦人は、倫敦市中の餘り物の食料品を自動車によりて日々蒐集しては更に之を勞働者に分配する事業を創始し、數週間の中に毎日千人分の食料を扱ふやうな繁昌を來し、次第に大規模の事業とならんとしつゝあると申しますが、今日嬢が之が爲に使用しつゝある自動車は六輛ださうであります。

蚊を殺す藥の一二

（通俗衛生第二〇三號）

近來一二藥劑の蚊を殺す效力試驗成績を得たれば左に之を示さん

（一）蚊の成蟲驅除に揮發性藥品三種卽ち石油「ベンヂン」、四鹽化炭素、片腦油を用ひ、深さ一尺口徑一尺の硝子筒に健全なる蚊五〇―七〇匹を入れ、三種の揮發性藥品の殺蟲作用を觀察せり（此場合に室温にて揮發せしめ別に合温せず）

以上三種の揮發性藥品に於ては約一立方呎の容積に一立仙を撒布し揮發せしむれば、四鹽化炭素は最も早く、片腦油之に次ぎ、「ベンヂン」は最も遲く約四十分にして蚊の全數を斃す、然るに斃れたる蚊を放置する時は「ベンヂン」、四鹽化炭素にては二時間―三時間にして蚊の全數は蘇生すれども、片腦油の瓦斯中に在りし者は蘇生者僅かに其半數に過ぎず、殊に同一容器内に置く藥液量を十分の一に減ずれば、四鹽化炭素「ベンヂン」にては殆ど殺蟲力なきも片腦油に於ては五十分にして蚊を斃すの力あり、故に千立方呎の室内に片腦油を加温して蒸發せしむる時は一〇〇立仙（立仙とは一立方センチメートル）にて充分なるべしと、次に室內等に蚊驅除の目的として藥液を撒布するを便とする事あり

試驗者は先づ藥用石鹼末五瓦を六〇%酒精一〇立仙に溫め溶かしたる液に除蟲菊丁幾、「フォルマリン」、「ベンヂン」、四鹽化炭素、片腦油、石油等を各同じ割合に混じ、更に之を水にて二十倍に稀釋し使用せり、其法先づ蚊七〇―一二〇匹を圓錐形の金網籠に入れ、周圍より噴霧器を以て各藥液を撒布し、蚊に對する作用を試驗せしに、「ベンヂン」、石油及對照藥用石鹼溶液の爲めには蚊は斃せられざれども、他の四種の藥液の撒布により蚊は一時容器の底に落ち液の蒸發したる後蘇生す、其落下する割合は片腦油に於て最も多くして全數の九〇%に達し、除蟲菊丁幾は約四〇%「フォルマリン」、四鹽化

炭素は各五〇%に上り、二時間の後には斃死數片腦油にては五〇%なるに他の藥液にては一〇%内外に過ぎず

之を要するに、瓦斯の狀態に於ても又撒布液としても、本邦に普通なる**發煙片腦油**は其殺蚊力強く且つ其價も他の藥品に對して廉なり

(二)蚊の幼蟲及蛹に對する消毒藥の作用　本試驗にはリゾール「クレヲリン」「クレシン」「アイゼル」、醋曹液、「デシンフエクトール」を同樣に五十倍、百倍、二百倍、四百倍、八百倍、千六百倍、三千二百倍に稀釋し、之を同大の硝子器に入れ、其中に蚊の幼蟲及蛹を約百匹づゝ放ち、其生死を檢査し且つ生存したる者より最後に蚊の羽化の有無を觀察せり

右試驗によれば獸醫用「アイゼル」液「クレシン」及後藤製「デシンフエクトール」は殆ど相等しく、而も奏效の速かなる點に於ては「クレシン」及「デシンフエクトール」は「アイゼル」に優る、其他の消毒劑の殺蟲力の順序を擧ぐれば、「クレヲリン」「アイゼル」溶液、赤札「デシンフエクトール」、醋曹液となると云ふ

小兒榮養品と經濟の顧慮

(實驗醫報第一年第一〇號)

ドクトルノイマン氏は、「小兒病療法」に於て次の如き名言を吐露せり。抑も小兒の榮養に大關係ある食費のことを等閑にするは甚無責任のことなり。余は嘗て二名の憐むべき貧家の小兒が、その寒き空乏の居宅に在るを見たるが、その傍に散亂せる卵の殼は母親がなけなしの小錢をはたきて小兒等に必要缺くべからざるものと誤想せる鷄卵を買ひ與へたることを證せり。余は思へり、鷄卵は――肉類とても同樣――貧素なる庖厨に於ては最も高價なる食料品に屬せり、若し彼の貧婦にして他の方法に依らば、同一の錢を以て遙に豐富にその小兒を榮養し得たらんにと。一個の鷄卵は五乃至十「ペンニヒ」を價し、僅かに七十五温單位を給するに過ぎず、然るに牛乳を以て煮熱せる大麥、燕麥「ズッペ」或は「グリースズッペ」の四分の一「リーテル」は七乃至八「ペンニヒ」にて三百六温單位を給し、加之鷄卵よりも多量の動物性蛋白を含有せり。若し彼の貧窮婦人にして更に低廉に經營を立てんとせば、恐らく自らその乳を出し得たるなるべし、然るときは是亦その榮養價の關係より見れば頗る廉價(十八乃至二十「ペンニヒ」)にて六百五十「カロリー」にして特に又甚貴重なる動物性蛋白の多量を含有し、一「リーテル」(蛋白約三十「グラム」)を以ては優に稍々生長せる小兒の一日の需用を充たすに足れり。然れば彼女は五乃至十「ペンニヒ」の鷄卵一個の代りに一日二回乃至四回、穀粉と「バタ」と食鹽の「ソップ」或は粥(二百六十乃至五百二十「カロリー」の榮養價を有す)を煮ることを得べきなり。「バタ」は廉價なる豚脂、「バタ」代用品或は亞麻仁油の如き植物性の油を以て補償し得べし。



雜報

○御著帶式

皇后陛下には豫て御妊娠の御模樣にあらせられし所愈〻御妊娠と拜診、御經過御順當御機嫌麗しく十六日宮內省より公表されたり。尙十八日の戌の日の佳辰をトし、御內儀に於て假御著帶式を行はせられたり。

○御仁惠

今般日獨事件に際して失眼又は手足切斷の軍人其他の者へ、皇后陛下より義眼、義肢御下賜の旨御沙汰ありたる所、尙收容捕虜にも同樣御下賜あるべき趣き仰せ出されたるに就き、聖旨の有ることころを右の內外軍人に遺憾なく逹するやう去る十五日岡陸相より關係所屬に訓令されたり。

○夏期轉地教養

伊崎陸軍少將の監督せる東京少年團にては本月二十八日より八月十七日迄二十一日間房州勝山町沼平旅館に臨海水泳部を設け水泳、軍事的教練、學科復習行軍見學等を爲す計畫の由なるが會員は少年團員及尋常四、五、六學年、高等小學校及中學一二學年の男生たるべく會費金十五圓（賄、宿泊汽船賃等一切を含む）人員は三十名を限り少年團の幹部にして小學校教員たる小柴、日野、保坂其他七名監督の任に當り又衞生主任としては武內醫學士附添ふべしと（申込所牛込市ケ谷富久町百十八日野鶴吉氏方）又昨年鎌倉に轉地休養教授を爲し好成績を占たる大日本學校衞生協會にては八月一日より向ふ三週間第四回夏期休養團を實施する筈なるが場所を鎌倉松葉ケ谷長勝寺に選び兒童は小學校尋常三學年以上中學二年生迄の男兒五十名とし特に體質の虛弱なる者を歡迎すべく每日森林或は海濱に生活せしむるは勿論運動、慰安、學習、衞生及食物等は凡て理想的に安配す

る由にて參加希望者は小石川區掃除町三十三大日本學校衛生協會に申込まるべく監督としては多年兒童夏期休養事業に盡瘁せる井上晴之助氏及本郷の赤井醫師其他本郷區内小學校敎員中の有志者數名終始起臥を共にして懇切周到に看護敎養の世話を爲す由なり。

○日本救護班の榮典

露國派遣の日本赤十字病院救護班は班員何れも元氣にて熱心に勤務し居る由なるが本月二日には露國皇太后陛下竝に皇妹ゼックセニア太公妃殿下親しく日本赤十字病院を御訪問あらせられたりと云ふ。又佛國最近の新聞に據れば佛國派遣の救護班も頗る好評を受けつゝあり。一看護婦雜誌は日本救護班はサハラの沙漠で救護所を開設するも少しも差支なきまでの用意をして來れり、醫師の消毒の嚴重なるは敬服すべく、治療上にも吾等に未知の新法を行へり。看護婦の愛嬌ありて敏活なるは餘程技術に鍛錬せるものゝ如く、多少佛蘭西語も話せ、何を云ふても怒ることなし等の批評をなし居れり。

○看護婦學校の指定標準

過般發布せられたる看護婦規則に關聯せる看護婦學校及び同講習所指定標準に關する訓令案は過日中央衛生會に於て決定せられ目下文部省に廻附して審議中なるが、其内容は左の如し。

一、修業年限二ケ年以上たること。

二、實習の便ある病院、校舍、機械、器具等の設備あること。

三、入學者資格は高等小學校卒業又は同二學年修了者若しくは之と同等以上の學力ある者。

四、學科は看護婦規則中に指定されたる學科以外に修身科を設くること。

廣告

○私立大日本婦人衛生會役員變更

前號報告の私立大日本婦人衛生會總會に於ける役員

改選の結果大體に於て變化なく唯幹事羽田三緒子幹事を辭して評議員に移り、長谷川仲子代りて幹事となり、評議員岩下ゆか子吉武輝枝子評議員を辭し、天野多喜子及小松いさ子代りて新に評議員となる。

○前號報告の補遺

前號總會記事中富士見軒に於ける祝賀の席に列せられたるは左の諸役員にして何れも寄附ありたるものとす。

濱尾作子　鳩山春子　岡田德子
高木錄子　山本多穗子　三浦敎子
石川貞子　長谷川仲子　土肥多越子
緒方悅子　片山かめ子　丹波貞子
高橋孝子　田村きよ子　中濱芳子
松井正子　岸澄子　三宅藤子
宮本樂子　宮下咲子　山口てい子
菊地みね子　古市幸子　天野多喜子

○新潟支會地久節祝賀

新潟支會は去六月二十五日午前十一時より地久節祝賀の爲め同市婦人敎育會、帝國婦人協會と聯合の上偕樂館に於て祝賀會を開催し、參會者百餘名、高田せん子の開會の辭に次て高橋講師、江口師範學校長等の式辭あり、後餘興に移り筑前琵琶、講談の外會員の假裝行列等ありて非常に盛況を極め、午後四時閉會せり、尙同會に於ては例年の通り七月二十日より海水浴場を開始し頗る盛なり。

○入會

○事務所申込

●本鄕區順天堂病院內　通常會員　石崎さら子
●麴町區元園町一ノ六　特別會員　神木靜子

○轉居

●牛込區ヨリ麴町區內幸町一ノ六へ　島崎愈子
●北海道ヨリ弘前市新町二五へ　市川りう子
●宇都宮ヨリ埼玉縣熊谷町外箱田へ　佐藤粂子
●旅順ヨリ四谷區仲町三ノ四へ　芳賀喜多子

私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁 東伏見宮妃周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子　同 長谷川仲子
同 岡田德子　同 高木傑子
同 山木多穗子　同 三浦敬子
同 松平芳子
評議員 石川貞子　同 羽田三緒子
同 濱田捨子　同 服部繁子
同 仁禮壽賀子　同 西升子
同 土肥多越子　同 緒方悅子
同 岡山とし子　同 小川孝子
同 男爵夫人 加藤鈴子　同 片山龜子
同 丹波貞子　同 高橋孝子
同 田村きよ子　同 鶴原誠子
同 男爵夫人 南部殷子　同 中濱芳子
同 山口貞子　同 子爵夫人 松井正子
同 古市幸子　同 小松いさ子
同 伯爵夫人 阿部篤子　同 天野多喜子
同 岸澄子　同 菊池峯子
同 三宅藤子　同 宮本樂子
同 宮下咲子　同 守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁 六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
（特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓）
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正四年七月二十二日印刷
大正四年七月二十五日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區根津西須町九番地 莊司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 田中梢藏
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鎗屋町 眞明堂
同市本郷區本富士町 文明館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市榮町六丁目 丸善書店

ラクトスターゼは有力なるブルガリアン乳酸菌製劑にして之を服用すれば腸内に於ける有害細菌の發育を阻止し或は之を滅殺して異常の腐敗醱酵を防ぎ便通を整理す故に自から新陳代謝順調となり老衰を豫防し能く多數疾病の禍原を除去す

優秀完全なる乳酸菌製劑

ラクトスターゼ
LACTOSTASE

（說明書進呈す）

適應症＝腸の疾患就中腸加答兒、盲腸炎、腸狹窄症、常習便秘、小兒の腸不消化及綠便、下痢、腸結核●腎及肝の諸症●腸内生產毒素の吸收又は排泄の不完全に因する種々の皮膚病●貧血●早老●動脈硬化並に蛋白質含有食品多食の要ある諸症

用量。一回〇・三乃至〇・四瓦宛（錠劑一回用量二個宛）一日三回食後直ちに服用小兒は約半量とす。

定價。内服用粉末十五瓦金八拾錢、廿八瓦金壹圓五拾錢、同錠劑五十錠金五拾錢、ブイヨン六瓦金拾貳錢、膣球六球金六拾五錢十二球金壹圓廿錢。

發賣元　東京市室町　三共株式會社

乳酸菌膣球

（ラクトスターゼ膣球）

生活乳酸菌を以て作られたる膣球はデーデルライン氏膣桿菌と同一の作用を膣内に呈し有害么微生物の繁殖を防ぐを以て其應用は能く子宮及膣の諸疾患殊に白帶下症、子宮頸管炎、分泌過多、分泌物の惡臭、老人膣炎等に偉効有り。

用法。膣球は臨時膣内に挿入す其使用前後に膣の洗滌を行ふの要なし。

婦人衛生雜誌第三百八號二（大正四年七月廿三日發行）—（明治四十三年十二月一日第三種郵便物認可）（毎月一回廿日發行）